

ブルー・アイランド氏が やりたかったこと

第4回 オペラの コレペティートル

歌い手に稽古をつけるピアニストを言う。しかしその受け持つ範囲はやや曖昧だ。オペラは、本来、管弦楽で伴奏するが、稽古ではそれがかなわないから、ピアノがその代わりに弾く。これを稽古ピアニストと呼び、彼らは自ら歌い手に口を出すことなく、指揮者の命するままにひたすらピアノを弾くのである。

実は指揮者にも何段階かあって、本番で振るのが(正)指揮者、その下で彼が不在の時に稽古の指揮をする副指揮者、合唱付き作品の時に、その箇所だけを指導する合唱指揮者がいる。「コレペティートルはその指揮者の意向を汲みとって、あ

らかじめ歌い手を指導する。特に、遅れて参加した者や足並みのそろわない者に個人稽古をする。初歩的な譜読み、音取りの手伝いから、言語指導、その指揮者の特徴まで、ピアノを弾きながら教え込むのである。だからコレペティートルは教師としての側面が強い。

オーケストラにはこのような職種はない。なぜなら、団員は厳しい入団試験を受け、楽譜を見て即座に弾く初見能力を持っているからだ。しかし、オペラ歌手は声の良さやキャラクターが先行するため、音楽的に未発達な人もいるわけで、20世紀にはイタリアのテノールなど、楽譜を読めない

というピアノも弾けないうような強者が居並んでいる。

ピアノを手段とするのだから、コレペティートルはピアニスト、あるいは、音楽大学ピアノ科出身者が多い。彼らはある時、オペラとの関わりがあり、独奏者としてよりもこちらを選んだのであろう。

オペラの伴奏譜は、一種の覚え書きだから、その通りに弾いても効果は薄い。管弦楽の音響を熟知して新たな音を加減していかねばならない。また、慣例によって楽譜と違う演奏法が行われる(省略、リズム、移調など)場合は、それを知らなければならぬ。副指揮者さえ不在の場合は、弾きながら指揮をすることもあり得る。すると多くの場合、彼らのピアニストとしての技術は変化し、書いてある楽譜に忠実ではなくなるのだ。また女性の場合、言動が雄々しくなることも否めないだろう。

わが国でこの名が初めて現れたのは、1975年、新興の東京オペラ・プロデュース公演で「コレプチ」と記されたのが初めてである。B(ブルー・アイランド)青島が「これは何のことか」とベテランの演出家に尋ねると、「君が今やっていることだよ」と言われた。そのせいか、Bのピアノの技術は荒っぽく、しかも言語指導はできないまま

文と絵 青島広志

1955年東京生まれ。東京藝術大学講師。洗足音楽大学客員教授。よみうりカルチャー荻窪で「(この曲)の意味と歌い方」、読売新聞社3階の「よみうり大手町スクール」で「大作曲家の秘話と秘曲」を担当しているほか、単発の「音楽家が語る日本・少女マンガ史」で過去の時間を語り合っている。



写真提供: Gakken Pub

